

先進国・後進国における共通 (2)

——ウィットフォーゲル『経済史の自然的基礎』解題——

川 田 俊 昭

今日迄、魚の居ない河川で、魚をとるという技術は未だ発見されていない。

K・A・ウィットフォーゲルは、その著『経済史の自然的基礎 Die natürlichen Ursachen der Wirtschaftsgeschichte』(1932)の中で、或る箇所と言う、『『今日迄』と、或る学者は嘲笑的に言う、『魚の居ない河川で、魚をとるという技術は未だ発見されていない』、と。』

ウィットフォーゲルが、同著(今日において尚、人々の理解の遠く彼岸にある、と私の考える同著)で言わんとする過半は、おそらくは、このシニカルな一行文に尽されていると言ってよいであろう。そして又、私が本稿のテーマの如きについて、従来思案し、考慮し続けて来た事柄——テーマと言ってもよいのだが——の若干とも、それは、相一致するものなのである。

私の場合、たとえば、先の某学者におけるよりは、遙かにセンスに乏しい、冴えない形ではあるが、次のようなものとしてイメージしていた。即ち、私が経済学の自修を志した頃、14、15才当時において、所謂労働価値説なるものは、時にそれが一派(亜流)の行文中、無暗に誇張されていると感じられる時——

コンクリートづくりの・がらんとしたビルの中で、只管、鶴嘴をふるう…

…コンクリートの瓦礫をつくっているに過ぎぬ一労働者

として、イメージしていたこと、これである。しかも、そのイメージは今日に至るも尚、脳裏に喰い付いたまま離れずにある。

……労働が、文字通り労働として意義があるのは、それがその本来の、或は固有の有効・効用(効果・効力)を発揮すべき一定の条件(自然的・社会的条件、殊に前者)においてこそ、ではないか。……ケインズの「有効需要」、シュムペーターの「新結合」、リスト・マルクスの「生産力」等々は、——それらが発展の動力であると同時に——まさしく斯かる有効を保証するもの、ではないか。……労働はそれ自体、価値があるわけではない、と。

昨年物故せる作田荘一氏の一論稿(「現代国民経済の趨勢」?)中に、財貨の価値は、

労働のみならず、自然（天然資源）が与えてくれるパーセントの大きい部分がある云々、とあるのを、私が多分に共感をもちつつ読んだのも又、その頃のことである。

当時、経済学殊にその自修を志す者にとって、巷間、経済原論、ケインズの所謂「需要供給の一般理論」の履修は、まさに基本的なものであった。それらの内容が財貨の価格、価値を廻っての純粋経済学に終始していたことも、又自明・当然であった。が、少なくとも、私には当然ではなかった。

一方、ケインズ、シュムペーター、他方、タールハイムの所謂「経済の基礎」を求めている、私のリスト、マルクス……等々への脱線、渉猟は、斯くして始まった。経済の自然的基礎、或は「経済史の自然的諸基礎」への傾斜・関心を強くしたのは、私の場合、大学院の一時期においてである。ウィットフォーク、Erich W・ジンマーマン……等に邂逅し得たのが、まさにその時期、矢張私自身の自修の際においてである。

「魚のいない河川で、魚をとるという技術」というウィットフォークの先の援用は、彼が、「16世紀以来のイタリアの経済的立ち後れの原因は、ドイツのそれに甚だ類似している」というテーゼの一つに——クリッシャー、ラムプレヒト、R・マイル等の見解を、彼流の見方・考え方で——経済史、殊に近代ヨーロッパ経済史について——確認する行文中に用いている。彼流の見方・考え方、即ち「資本制生産様式の具体的形成を、自然という契機がこれを本質的に制約した」という観点、これである。「蒸気機関の出現と共に、ドイツ資本主義に驚くべき興隆を来さしめた、かの新しき自然という契機が現実的になった19世紀に、イタリアのブルジョアジーはその経済的領域になかったものを現実化することは出来なかった。『今日迄』と、或る学者は嘲笑的に言う、『魚のいない河川で、魚をとるという技術は未だ発見されていない』、と。今日迄と、我々は言う、石炭の様な消費材料——勿論、それが従来の技術的役割を有すると前提して——が近所になく、重工業を建設する技術は発見されていない。」

W・ゾムバルト『高度資本主義時代における経済生活』（『近代資本主義』第3巻）によれば、「無機的な地下財……最重要なものとしての石炭……コークス精錬法のうちにこそ、近代を理解し得る鍵がある。」「コークス精錬法こそは、地球の内部に鉱石の形をもって秘められていた宝庫を、人類が開くことの出来た最も代表的な方法である。そして、それによって、古い時代がおぼろげにさえも知らなかった巨大な富に触れることが出来たのである。……人類は初期資本主義の終りまでは、その所得によって生活していた。それは年々太陽エネルギーの形で与えられていた。そして、それが作り出したものは植物や立木として、同じ年の間に生育して来るもの、言い換えればこの太陽エネルギーを生ける原料及び動力に変化させるものであった。しかるに——今や同じ人類は地下の財宝として、

過去幾百万年の間地球上に降り注いだ太陽エネルギー、言い換えれば一つの財産にはかならない太陽エネルギーを、自己のものとすることが出来たのである。人類は今や近代技術の諸発明によって、この財産を（年々の所得と共に）喰い得るようになったのである。」

そこには、近代技術によって、原料及び動力に関し、「植物や立木」から「石炭」への転換が、含蓄深く語られている。併せて、今日の資源問題（後述）に対する洞察が、既にそこにはある、と言うべきであろう。

他方、ウィットフォージェルによれば、「木材……が、豊富に、即ちイギリス資本主義の労働の生産性が更に競争国と比較して最大限にあるために充分な程豊富に存在していたということ、このことこそイギリス産業が早期資本主義時代に獲得し、19世紀の終り頃に至る機械工業時代にも依然として有していた指導的役割にとって、決定的に重要であった。」しかも、加えて、「新しい方法が、木材の代りに石炭を冶金に用いることを可能ならしめるに至った時に……その時に開始された労働状態は、単にイギリスの当時の諸事情に対して巨大な鉄鉱層を再び現実的ならしめたのみならず、特にもっと遙かに老大な石炭埋蔵量さえも現実化するに至った。……イギリスは世界の産業工場となった。」

即ち、イギリスの場合、「木材」、「石炭」と（二重に、引続いて）自然的富に恵まれていたこと、換言すれば、「現実的になった中心的な自然的労働手段が甚だ多く存在するということが、……先づ絶対にイギリスに有利に決定せしめた。」

ウィットフォージェルの最初の師（ともいうべく）マックス・ウェーバーは、或る時、「我々の文明は、最後の1トンの石炭で最後の1トンの鉄を鋸かす時、終了するであろう」、と述べたというが（ゾムバルト）、それは、如上のゾムバルト、ウィットフォージェル双方に通ずる、象徴的乍ら一つの確かな・客観的眞実を衝いた、予言というべきである。

蒸気機関の出現——近代……それが象徴するものは、石炭と鉄の新しい結合様式、新しい技術である。しかるに、イタリア——「イタリアの鉄の状況はかなり不利であったし、又現在もそうである。石炭の状況は全く不十分だと言わねばならない。」

殊に石炭！「イタリア、オランダ、フランス、スイス等の諸国は、その重工業の発展のために甚だ痛ましくも、現実的な自然富が極く僅かしか自由にならない——長距離の石炭の運輸は、これに対する代償を許す程度という周知の技術的・経済的理由から、排除された——ということを見せざるを得なかった。」

生産力の発展に対する自然的契機の決定的意義！

私個人の経験に徴して、第2次大戦後のイタリア産業が私自身にもたらした物品は、少くとも二つある。一つは靴下（木綿）であり、他の一つは時計バンド（金属）である。

国産品に比し、前者は生地はともかく、その染色の良さに一日の長がある。私の常用す

る黒無地の染色について、国産品は洗濯を重ねる毎に急激に褪せ、汚れたドブネズミ色になるのを如何ともし難い。しかるにイタリア製は遙かに褪色が遅い。後者の時計バンドについて言えば、国産に比し、デザインも趣味よく、しかもがっしりした造り・耐久性を有している。

仄聞するところによれば——靴下の染色、時計バンドの加工技術について、ドイツの技術がそのまま導入されている（靴下について言えば、ドイツからの輸入染料がそのままイタリアで用いられている）とのことである。ムッソリーニによるイタリアの近代化、そして彼とヒットラーとの提携は、今一つの実を結びつつあるのか。

カーペット、毛布、膝掛け、その他におけるドイツ製品の染色の見事さは、夙に私の経験したところであり、又ドイツ製刃物（ペンチ類を含む）の優秀さも又、常に実感するところである。

従って又、価格において、ドイツ製が国産に比し遙かに高価であるに反し、イタリア製はさして国産と違わない。例えば、刃物の一つ、鋏におけるドイツ、イタリアの比較はその好例である。即ち、ドイツ製（ヘンケル）が国産の数倍であるに対し、イタリア製はせいぜい1.5倍程度である。同時に、品質も価格に比例する。

皮革製品、ガラス製品等手工芸品（繊維製品を含めて、それらが労働集約的製品であることに注意せよ！）におけるイタリア製のユニークさはともあれ、重工業におけるイタリアのドイツに対する後進・絶対的較差は、如上の私個人の瑣末な経験よりしても、容易に推測し得るところである。

イタリアのドイツへの後進——ウィットフォーゲルによれば、「自然という契機」が、換言すれば鉄・石炭についてイタリアがドイツに劣るということが、斯かる結果を導くこととなったのである。「ツュープリンがやったように、斯かる原料の状態のために『イタリアは工業国となり得な』かったことを直接に解明することは、たとえ甚だ困難であるとしても、他方、一定の精製工業、特に繊維工業を基礎とせるイタリアの産業資本主義の一面的發展は、斯かる点にその根拠をもっていることは全く明瞭なことである。……イタリアはドイツと殆んど同時代に統一国家となった。両国の従来 of 産業發展の本質的に異った性質は、かの『変異 Variationen と濃淡 Abstufungen』の命題の正しいことに対して、全く生々とした説明を与えている。」

では、ウィットフォーゲルの「かの『変異及び濃淡』の命題」とは、何か。

西洋の種々な部分の地方において、遅かれ早かれ、先進国が後進国に影響を与えつつ早期資本主義的形態への移行が起きている。

「産業的に発展した国は、発展のおくれた国に対し、他ならぬそれ自身の将来の姿を示す。」

マルクス『資本論』第1版序文におけるこの文言に相応すべく、ウィットフォークゲルは書いている。「西洋の種々な部分の地方において、遅かれ早かれ、先進国が後進国に影響を与えつつ早期資本主義的形態への移行が起っている」と。

しかも、続けて、「しかし、新しき段階へ攀じ上ることは、個々別々の国が、全く同様になし得たわけではなかった。ヨリ以前の生産様式と同じく、この時にも『同一の経済的基礎——主要な条件に従って同一な——は、種々な経験的状态、自然的条件、人種関係、外部から働く歴史的影響等々によって、単に経験的に与えられた状態の分析によってのみ把握し得るところの、無限の変異と濃淡』とを示した。」

歴史にはモチーフが必要である、と言われる。歴史的・動態的契機（動力）、これである。

私は嘗て、「シュムペーターの動学」なる一篇において次の様に書いた。

……静学に比し動学に於ては、その固有の現実的性格から方法的にも殊更に次の様に主張し得る。即ちアモンの謂える、「斯学（経済学）は常に事実の『過程』のみならず、その一定の性質を有する関聯の『理由』をも示す必要がある。……相互依存関係を認識しても我々は決して満足し得ない。斯学は、この相互依存関係の原因を認識して初めて存立する。知ることは因果関係によって知ることである（Scire est per causas scire）。」「知るということは諸原因を通じて知ることである。」（メンガー）……「『原因』及び『結果』の概念を出来る限り回避し、ヨリ完全な函数概念によって置き換えること」——を主張したシュムペーター（『理論経済学の本質と主要内容』）は、まさに静学におけるその典型であったが、動学における彼（『景気循環論』）は又、その反対の極にあるものとしての典型を我々に示す。「原因を早急に問うことに対する警告にどれ程賢明さがあるにしても、この質問は答えられるまでは常に問われるだろう。加えて、機構の我々の測定や記述の関係についての命題のすべてが、それらが示された原因から結論として出てくるものと解される様な仕方では、この原因に結ばれるまでは、又は同じことを我々の言葉で言えば、原因、機構、結果を一つの模型に集約し、模型がどのように働くかを示すことが出来るまでは、我々の心は決して安まらないだろう。そしてこの意味では、たとえ我々が反対するとしても、因果関係についての問題は問われるべき唯一のものでなく最初のものではないにしても、基本的な問題である。」

本稿で問題としているウィットフォークゲルの論稿のタイトルに、Ursache（原因）なる語の用いられている所以である。

更に、私は他の稿、「経済学の方法」（その一）で、次の様に書いている。

……ある巧妙な言廻し方によれば——経済現象（社会現象、文化現象）が自然と社会

(人間)との交互作用によって生起するものである以上、必ずしも構造理論＝経済社会学とは限らない。……経済における社会的・文化的(精神的)契機——人間の社会的・経済的行為の動機、志向的意志・意欲・感情(それは我々の社会生活・経済生活に、我々人間が行為上自覚する「目的」,「理想」乃至「文化価値」を前提する)——を「説明契機 Erklärungsmoment」として——通常行われている如き「实在契機」としてではない——,しかも相対的に(社会学者からその著『近代資本主義』における風土派的態度を難詰されたが故にこそ却って偉大なゾムバルト!)重んずる社会学的・主観主義的構造理論の他に、経済現象の自然的・地理的契機——空間的束縛性 Raumgebundenheit その他に、特別の意義を与える地理学的・客観主義的構造理論も又可能である。或る種の考え方によれば——「人間そのものが自然の一産物」(エンゲルス)である。「肉 Fleisch と血 Blut と脳髓 Hirn をもって、自然に属しているところの自然の一部である。……」……(シュムペーターの言う)「人が『民族性』と呼ぶ精神的及び生理的習慣(にせよ),その支配する土地,その生活する場所の気候,簡単には地理的環境に程度の差はあれ,しかし如何なる場合にも著しい程度に於て依存する。植物や動物と同様に,人間における又彼の能動及び受動における多くの事柄は,少くとも地理的環境の影響から理解されねばならず,その限りにおいてこの影響に無関係なものとして対立せしめ得ないということは,人類学,『人性学 Ethologie』,他の側面からは生理学が教えるところで(も)ある。」

ウィットフォージェルにおける歴史的・動態的契機——更には彼の所謂「変異と濃淡」を表すもの——が,「経済現象の自然的・地理的契機」であることは,最早自明である。彼の論稿のタイトルに natürlich という修飾語が用いられ,(タイトルの全体が) natürlichen Ursachen der Wirtschaftsgeschichte とされた所以である。

ウィットフォージェルは,上述の(殊に前半の)シュムペーターの(或は私の)論理そのままを出発点とし,〈自然的契機——生産様式——生産関係〉と結構するのである。「理論的な分析は,新しい基礎の,中心をなす足場を明らかにすべきである。具体的なる経済史は,斯かる理論的な核心の分析を知ることなしには,一步も進み得ないが,同時に又それは,産業資本主義が,或学者の言う諸状態(客観的及び主観的自然的諸条件と国際関係の影響)の影響の下で,個々の地方に発展せしめた所の多くの変異と濃淡とを究明すべきである。我々の現在の考察では,従来と同じくここでも又,第一位に置かれた外的な・客観的な自然的条件の契機を前面に押し出す。……外部から来る反作用の問題並びにこれから誘致されて発展した生産関係の問題は,近代資本主義の発展の個々の経過と段階とを跡づける経済史の叙述に対しては,時に有意義なものとなる。」

従って又,我々は,斯かるウィットフォージェルが,ゾムバルトにおけるが如き方向の歴史(的方法,私の所謂「社会学的・主観主義的」)に,批判的ならざるを得ないこと——時に批判の度を過ぎること——を理解する。「我々の歴史分析は,ゾムバルトが,最近要

求しているが如き、意志自由なる仮定からは出発しない。意志自由は一つの神学的要請である。社会の科学的把握は、斯かる前提によっては不可能である。……ゾムバルトでさえ、このことを見ざるを得なかった。従って、彼は後に自ら、意志形成を画一ならしめる基礎要因として、『性格』、『魂と血』、及び『最後に』、『外的状態』——その中で『更に』『土地及び気候なる自然諸事情』も又(!)挙げられている——をも、引用している。……社会的に生産する人々の意志方向 Willensrichtung 並びに活動は、最も一般的には人間の生理的性状 physische Beschaffenheit……によって制約されるのであるが、特に斯かる彼の活動の客観的基底により——しかも、その時々には到達した発展段階によって、その度毎に変化せしめられた仕方——で——制約されるのである。……既にヘーゲルの言ったように、人間は、彼に道具を賦与する外的自然の上に、あらゆる『権力 Macht』を行使するにも拘らず、その目的措置 Zwecksetzungn において自然に『隷属している』……問題の社会的側面のみを専ら問題とする経済的発展の分析は、いづれも不完全であり、不具的であり、誤っている。……『従来のすべての歴史観は、歴史の斯かる現実的な基礎を、全然捨てて顧みなかったか、もしくは、これを附属物としてしか考察していない。斯くして、自然に対する人間の関係は、歴史から排除され、従って、自然と歴史との対立が作り出される。』」

多くの本質的に非進歩的な経済史のみでなく、進歩的な人々による経済史的
＝社会史的労作の殆んどすべてが、ここに提起された要求を満足させていない。

斯様に、ウィットフォーゲルの批判は、更に徹底化される。「従来のすべての歴史観は、歴史の斯かる現実的な基礎を、全然捨てて顧みなかったか、もしくは、これを附属物としてしか考察していない。斯くして、自然に対する人間の関係は、歴史から排除され、従って自然と歴史との対立が作り出される。」

私の想像するに——ウィットフォーゲルにとっては、マルクス（の社会理論）でさえ、充分でなかったに相違ない。

たとえば、マルクスは『資本論』第一版序文において、次の様に書いている。「私がこの著作で探究しなければならぬものは、資本主義的生産様式であり、これに相応する生産諸関係及び交易諸関係である。その典型的な場所は今日までのところイギリスである。……だが、ドイツの読者がパリサイの徒的にイギリスの工業労働者や農業労働者の状態について肩をすくめ、或はそれと同時に、楽観的にドイツでは、事はまだ永い間そんなに悪化しないのだと言って自ら慰めているとすれば、私は彼にこう呼びかけなければならない。De te fabula narratur ! (ここで報告しているのは君のことなのだよ!) と。……それ自体としては、問題は、資本主義的生産の自然法則から生ずる社会的敵対関係の発展程

度の高いか低いかということにあるのではない。問題として取扱うのは、これらの法則自体であり、鉄の必然性をもって作用し且つ貫徹するこれらの傾向なのである。」

先づ、本援用の後半から問題にして見よう。所謂法則について、マルクスはここで、「資本主義的生産の自然法則」、「法則自体」、「鉄の必然性をもって作用し且つ貫徹する傾向」(傍点筆者)——といったかなり強い表現を用いている。が、しかし、ウィットフォーゲルにおける場合は、むしろ、更にシビアと言わんか、強烈と言わんか、窮屈と言わんか、偏狭と言わんか、……彼は、マルクス『資本論』の本文より援用、しかも、それを更に強化させている。「……たとえ人間が労働過程において、労働手段の能うる限り巨大な装置を、自己と自己の労働対象との間に入れ得るとしても、その労働対象は、究極においては、依然として自然自体である。『一方の側には人間とその労働、他の側では自然とその素材』、これは社会的労働過程における最も普遍的な基本関係であって、この社会的労働そのものと同様に、『人間生活の永久的な自然的諸条件、従って、斯かる生活の各々の形態とは独立の、むしろあらゆる社会形態に共通せる』ものである。……或る大哲学者は、このことをヘーゲル論理学に関する彼の註釈において、次の如く言い表している。

『機械的法則と化学的法則とに分類された……外的世界の法則は、人間の合目的的活動の基礎をなしている。人はその実践的活動において客観的世界に対立し、これに依拠し、そして自己の活動はこれによって制約される』、と。……生産の物的諸条件、所謂技術はその性質上、その構成上、『外的諸条件(自然法則)により』制約される。即ち、人間は、自己の労働の『指導的』手段の構成並びにこれによって遂行される社会的労働行為自体において、『外的世界、即ち自然』に依拠し、『そして、彼の活動はこれに制約される。』斯かる外的自然的世界の法則は、『人間の合目的的活動の基礎』を形成している。斯かる制約は、発展過程の制約を意味するに外ならない。社会的生産諸力の生成、特に、その物的核心たる技術の生成は、その時々活動的な自然諸契機の構造によって制約されている。

マルクスが、ウィットフォーゲルにおける程、徹底した「自然法則」を云々したかについては、確かに問題がないわけではない。エンゲルスが『自然弁証法』を書いた時、実はエンゲルスは、マルクスにおける斯かる面の不充分或は欠陥を補わんとした、のであるという通常の理解は、確かに一面の真実を衝いているのである。

ウィットフォーゲルの言う、「我々のとる社会科学体系においては、いやしくも歴史究明に関する限り、自然諸契機は排除し難き確固たる地位を占めている。」或は言う、「自然的基礎……斯る基礎の分析なしには、又斯かる基礎の上に行われる発展の、斯かる基礎からの説明なしには、産業の歴史的過程の合法則性は、科学的に闡明され得ないこと、明らかである。」

ウィットフォーゲルの斯かる基本的見解は、例えば、彼の『支那の経済と社会』(1931)によれば、彼がマルクスの『ドイツ・イデオロギー』の次の一テーゼより出発したことによる。「すべての歴史記述は、これら自然的諸基礎と、歴史の行程での人間の行動による

これらのものの変更とから出発しなければならない」, これである。彼の『経済史の自然的諸基礎』なるテーマ自体, 本テーゼによるものであることは, 明白である。

では, ここに言う「これらの自然的諸基礎」とは何か。マルクスは, こう書いている。「すべての人間史の第一の前提は, 勿論生きた人間的個体の生存である。従って確認され得る第一の事態は, これら個人の身体的組織と, そしてこれによって与えられるところの, その他の自然への彼等の関係とである。」

但し, マルクスは続けている。「我々はここでは勿論人間自身の肉体的性状にも, 又人間の眼の前に見出される自然条件即ち地質学的・地理学的・風土的その他の諸関係にも立入るわけにはゆかない」, と。

即ち, マルクスにとって, このテーゼは, (彼自身の言葉によれば)「我々が出発する前提」であり, それ以上の何ものでもないのである。

もっとも, この前提は, おきまりの, 好加減のものではない。「なんら任意のもの, なんら教条ではない。それは, ただ想像のうちでのみ捨象され得るところの現実的な前提である。それは現実的な諸個人, 彼等の行動であり, そして眼の前に見出されもすれば自身自身の行動によってつくり出されもするところの彼等の物質的な生活条件である。従ってこれらの前提は純粋に経験的なやり方で確認され得るのである。」

と言って, マルクスの場合, 「これらの前提」が文字通り, 前提であることに変わりはない。換言すれば, それは前提であっても, それ自体が直接に問題にさるべき性質のものではないのである。

しかるに, ウィットフォーゲルの場合, 彼が, マルクスのこのテーゼを護符よろしく奉るのは, 実に, 彼が, このテーゼ自体 (の内容) を問題にすることにある。いわば, そこに, ウィットフォーゲルのマルクスについての意識された誤解 (?) があったと言うべきであろう。

斯くて, ウィットフォーゲルは, 『支那の経済と社会』において, 敢て次の様に言う「……マルクスは, 近代資本主義の社会的諸範疇を説明するに当って, 常に, これらの範疇の基礎をなしている自然的に物的な諸要因を, 予め明瞭にしたのである。……マルクスが, 一経済形態——その現象諸形態は, 一切の彼の読者が少くとも断片的に, 直接的には実践的に, それを見て知っている——を分析した場合には, 常に斯かる態度をとった。従って, 広大な東方の社会体を研究するに当っても, 決定性をもつ生産諸力及び自然諸条件——それらから, この生産諸力が, 弁証法的交互作用をなして生ずる——の詳細なる解明を絶対に必要とするのも, この理由からである。……我々は, この社会秩序に対する吾人の分析をも, 生産諸関係という『第二階』からや, 同様に又, 生産様式という, 又はその完成せる構造における生産過程という『第一階』からして, 始めることは許されない。……社会的に条件づけられた生産諸力及びこの生産諸力の発展過程を規定しつつある, 自然によって条件づけられた生産諸力の特質が, 確定された時にのみ始めて, 社会的

機構全体の分析は、有効に遂行され得るのである。……我々の研究の出発点及び基礎計画は、これらの点をば商量してあることによって、一義的に確定されているところである。」

ウィットフォークルの如上的ような徹底は、先のマルクス『資本論』第一版序文の前半についても又、マルクス自身とは異った、ウィットフォークル固有の考え方・結論を導くこととなっている。

マルクスによれば、「資本主義的生産様式……その典型的な場所は、今日までのところイギリスである。これが私の理論的展開の主要説明に何故イギリスを用いるかの理由である。」

しかしながら、その場合、先づ、何故イギリス自体先進的であり得たか、ということは問題にされない。この場合も又、それは問題でなく、前提——「我々の出発する前提」なのである。従って又、次に、何故イギリス以外のヨーロッパ諸国、たとえばドイツが後進的ならざるを得なかったか、ということも問題にならない。つまり、マルクスの理論は、本来、斯かる問題解決のためのものではないからである。と言うことは又、「ドイツの読者」が先進国イギリスの悲惨についてたとえ無関心であっても、彼等を責めることは、少くとも斯かるマルクスには不適當である——その資格はないというべきであろう。

しかしながら、ウィットフォークルの場合、斯かる問題への解答は決して困難ではない。何故か。（甚だ奇妙・意外なことを、私は言うようだが）マルクスの理論が純粹理論であるに対し、ウィットフォークルの理論は与件理論 *Datentheorie* であることによる。

マルクス自身、彼の理論の純粹科学的性格について、該援用の前に言っている。「物理学者は自然過程をこう観察する。即ち、或は自然過程が最も適確なる形態で、攪乱の影響によってかき乱されること最も少く、現れる場合をとるか、或は可能な場合には、実験を、過程の純粹なる進行 *reinen Vorgang des Prozesses* が確保される条件の下で、行うのである。……これが私の理論的展開の主要説明に、何故イギリスを用いるかの理由である。」

いわば、マルクスの理論には、法則——一定条件 (*ceteris paribus*) に成立するところの必然的過程、即ち「資本主義生産様式」の過程自体、の説明はあっても、過程（内的過程）の因子——以外による説明はないのである。

又、マルクスの場合、それが当然、自明なのである。彼自身書いている。「資本主義的生産の自然法則……問題として取扱うのは、これらの法則自体であり、鉄の必然性をもって作用し且つ貫徹するこれらの傾向なのである。産業的にヨリ発達せる国は、発達程度のヨリ低い国に対して、それ自身の未来の像を示すだけのことである。……近代社会の経済的運動法則を闡明することが、この著作の最後の究極目的である。……私の立場は、経

済的な社会構造の発展を自然史的過程として理解せんとするものである。……」

これに反し、ウィットフォーゲルの理論における場合、たとえ同一の経済たりと雖も（彼にとって、むしろ経済こそ「与件」である）、その与件——歴史的・制度的……自然的・社会的……与件、就中自然的条件・自然契機 *Naturmomente* の如何に応じて、無限の可能、「無限の変異と濃淡」を示し得る（と考慮される。）

換言すれば、マルクスの場合における如く、ただにイギリス——乃至イギリスを先端とする単線的な発展——のみならず、「多くの変異と濃淡」が明らかにされるべきである。

ウィットフォーゲルの言葉を再援しよう。曰く、「『同一の経済的基礎——主要な条件に従って同一な——は、種々な経験的状态、自然的条件、人種関係、外部から働く歴史的影響等々によって、単にこの経験的に与えられた状態の分析によってのみ把握し得る所の、無限の変異と濃淡』とを示した。理論的な分析は、新しい基礎の、中心をなす足場を明らかにすべきである。具体的なる経済史は、斯かる理論的な核心の分析を知ることなしには、一步も進み得ないが、同時に又それは、産業資本主義が、或学者の言う諸状態（客観的及び主観的自然的諸条件と国際関係の影響）の影響の下で、個々の地方に発展せしめた所の多くの変異と濃淡とを究明すべきである。我々の現在の考察では、従来と同じくここでも又、第一位におかれた外的な、客観的な自然的諸条件の契機を前面に押し出す。」

新しき段階へ攀じ上ることは、個々別々の国が全く同様になし得たわけではなかった。

ウィットフォーゲルは、この言葉によって、「近代的資本主義の変異と濃淡」——先づ、ドイツが何故イギリスより後進ならざるを得なかったか、或は少くとも資本主義の初期において立ち後れざるを得なかったか、の問題を、彼の所謂「客観的な自然的諸条件の契機」に関わらせて、考察・説明せんとする。

ドイツの後進、不利に関し、ウィットフォーゲルの指摘する第一の契機——「客観的な自然により条件づけられた契機の一つとして、特に位置 *Lage* がある。」

もっとも、（彼によれば）それを指摘したのは、彼が初めてではない。「地理的位置の弁証法——古代、中世、近世、現代——は、先学が既に1850年に甚だ詳細な論述において述べている。略1500年頃の、地中海から大西洋への世界経済の転回及びこれと結合せるドイツの経済的不利は、彼等によって最も強く強調されている。これにより惹起された『ドイツの世界貿易からの排除』については詳細に述べられている。1848年に関する論文の中では、19世紀初期に至る『ドイツ産業の立ち後れ』の第一の主要なる原因として、ここでも挙げられているものは、『この国の不利な地理的位置、世界貿易の最も主要な通路となっていた大西洋からの隔在』である。」

更に、近くは、「ドイツが早期資本主義的發展の『背後に』止まったことは、M・ウェーバーも又確認したところである。ラムプレヒト及び他の歴史家達は、ここで述べられた意味での位置の關係の變化と、斯かる事實との間の聯関を發見し、1500年から1800年迄のドイツ經濟發展の立ち後れの個々の特徴と様相とを具体的に論述した。」

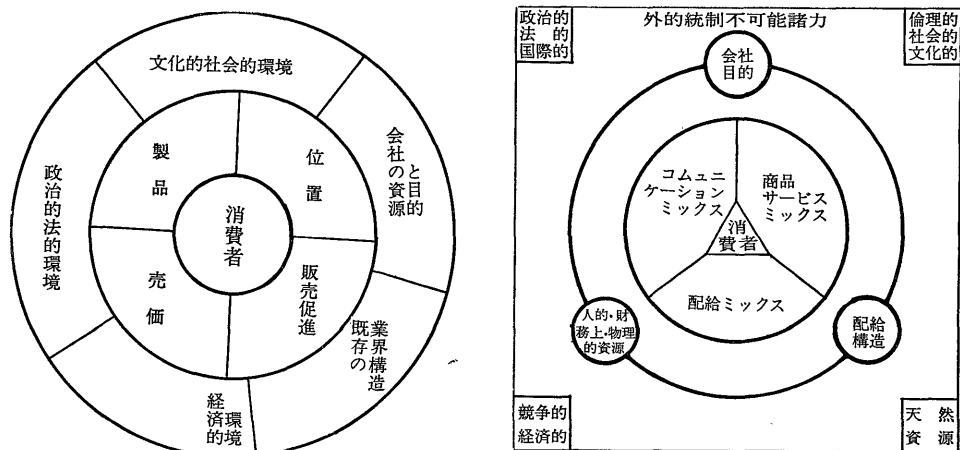
近年、経済学に比しての経営学、殊にマーケティングの分野における發達は、著しいものがある（というのが、私の見解の一つである。）その論理的結構、学的精緻において、確かに経営学は経済学と対等たり得ないかもしれない。しかしながら、私の殊更に重要視するのは、現実問題に処する彼等の真摯さである。

ウィットフォークルが、「客観的な自然により条件づけられた契機の一つ」として挙げた「位置」の問題——それは、経済学においては少くとも体系的には何ら問題とせられなかったし、今日でも又全然無視されているところであるが——、マーケティングにあっては、その古典の一つというべくハワード（John A. Howard）において、「マーケティング・マネジメントの本質」を構成する主要の一つとして、「立地」が挙げられている。

ハワードは、マーケティング部門の立場から、統制不可能な要因を「環境」（経済学における所謂「与件」）と呼び、これに競争、需要、非マーケティング費用、配給構造、法律を挙げているのであるが、他方、統制可能な要因として、製品、配給経路、売価、広告、販売員等による販売、そして（我々にとって問題の）立地を、挙げているのである。

しかも、それらのものをもって、絶えず變化してゆく環境に対して創造的に適應してゆくことがマーケティング・マネジメントの本質とされている点、重大である。事実上、如何程、その機能が、或は確実が保証されるかは極めて不確かではあろうが、マーケティング乃至マーケティング学者の現実問題への真摯、その迫力は、到底、（今時の）経済学乃至経済学者の及びもつかぬものがある。

更に、マッカーシー（E. Jerome McCathy）、ケリー（J. Kelley）等における場合は、次の如きである。



マッカーシーの場合、統制可能な要因の一つに「位置」が、ケリーの場合、統制不可能な要因ではあるが、その一つに「天然資源」が挙げられていることは、我々の場合、大なる注目を要するところである。

「位置」に関しては、ドイツの不利が指摘せられたところであるが、それでは、同じく「客観的な自然により条件づけられた契機」の別の一つとしての、「天然資源」に関して、ドイツは如何様であったか。

ウィットフォーゲルによれば、「位置」の問題は、その後においては、むしろ二義的となった。「機械的工業の発生と共に空間は収縮された」、と。「同時に今や、原料問題は以前に見ぬ現実的なものとなって来た。」

「位置」に代って、「天然資源」の問題が、大きくクローズ・アップされて来たのである。と共に、そのことは、ドイツにとって今度は有利になって来た、と。蒸汽船と鉄道の時代——「19世紀の当初には、従って、石炭と鉄とが豊富なドイツ資本主義は、石炭の供給の点で、ハンディキャップのあるフランスを追い越し、それどころか後に発生した、従って比較的合理的に組織された大工業によって、従来工業の模範国であったイギリスに対抗することさえ出来た。勿論、原料という基礎は、ヨーロッパの高度資本主義の、斯かる新しき変異の一つの契機に過ぎないが、明らかに一つの甚だ重要な契機である。……」

我々のとる社会科学体系においては、いやしくも歴史究明に関する限り、
自然諸契機は排除し難き確固たる地位を占めている。

斯かる一般的命題を掲げることによって、ウィットフォーゲルは「あらゆる経済的＝社会的発展の自然的基礎の問題を、方法論的に検討」、その一つとして近代ドイツの場合を考察しているのであるが、そのドイツについての考察の終り近く、ウィットフォーゲルは、次の如く結ぶ。「斯くて、ドイツ史の領域にあって、社会的に労働する人間の活動性は、資本主義の早期、盛期、末期においてその時々全く特殊な自然的契機を見出し、これを変化し、現実化し、もしくは現実化し得なかったのである。」

ウィットフォーゲルのこの言葉によっても、彼の言わんとするすべてが、ただ自然をのみ強調することにあるのでないことを我々は悟るべきである。ドイツに関わる箇所ので、例えば、彼は次の様にも言っている。「土地からは何等の階級も生じない。階級構成、階級対立、階級斗争がそこから出てくる場所のものは、最広義の『土地』により、即ち自然なる契機により決定的に制約されたる、その時々一定の種類、豊かさ及び方向をもつ生産過程である。」

自然は、(自然それ自体ではなく) 自然についての(我々の労働、もしくは技術による)

利用の仕方、即ち「生産の仕方」があつてこそ、我々には意義がある。と言つて、我々による利用——「現実化 Aktualisierung」の仕方のみを偏重し、当の自然を忘れるならば、これ又、片手落となる。「労働行為をもつ人間は、不休・運動の契機を代表し、自然は本来のままで、もしくは変容せしめられて、客観的基底——その物的構造如何によつて、労働行為を全く一定の方向に導く（か、もしくは導かぬ）所の——の契機を代表する。」
「社会的生産諸力の生成、特にその物的核心たる技術の生成は、その時々活動的な自然諸契機の構造によつて制約されている。」

斯かる自然についての利用の仕方そのものは、（ウィットフォーゲルによれば）「生産様式」として把握され、「生産関係」とは明らかに区別される。

にも拘らず、従来、この概念について多くの誤解或は混同があつた、とウィットフォーゲルは言う。「『生産の仕方』、『物質的生産の仕方』、『物質的生活の生産の様式』と言われるところのものの地位及び意義が必ずしも正しく受取られていない、ということと、次のこととは關聯がある。即ち、この概念を分析する際、及び事実誤った技術主義の見解に対して論駁する際に、正しい考えの中核が抹殺されたり——それに対応して、具体的な歴史究明の際、概念の輕視が行われたり（クノウ）——もしくは、この概念の中では、社会的側面が『優越的』であると主張する際、この概念は叙述の全体系において從属的な地位に押しやられ、従つて、生産力の概念との關聯及び生産關係なる概念との關聯が明瞭でなくなつたり（カウツキイ）、或は又、それどころか、生産様式なる概念と、生産關係なる概念とが簡単に混同されたりしている。（最近、再びタールハイム及びマンハイム）。これらに対しては、生産の仕方と生産關係とは、絶対に區別さるべき範疇であり（このことは、両者が弁証法的な相互依存の關係にあることを妨げない）、そして、生産の仕方は規定的な契機 das bestimmende Moment であり、これから生産諸關係の態様と變化が導き出される、ということが、指示さるべきである。……生産様式とは、『現実的生產過程』、即ち、人間と自然との、その時々『物質代謝』の本質的な要素の全体であるが、その際、ヘーゲル以下の人々によれば、その性質は、全く自然の機械的＝化学的合法性なる外的条件により条件づけられたる側面たる、斯かる過程の物的側面を強調する必要がある。……生産の仕方が先づ第一だ！ しかし、その内部で生産諸力の自然により条件づけられた部分に、明々と光が投げかけられることが必要である。だから、すべての歴史記述は、斯かる自然的諸基礎及び歴史の経過におけるその変容から出発しなければならないのである。」

この最後の一行が、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』のそれ（前述）、であることは言うまでもない。

ウィットフォーゲルによれば、生産様式を、更にはその自然的諸基礎（自体）を問題にし、強調することも、マルクスが意味させたところに忠実に従っている——その実、彼は

マルクスの修正乃至批判を行っているというのが、私の考えであるが——、と言うのである。『支那の経済と社会』で言う、「本書で、我々は、マルクスの研究方法をその完全な唯物論的非妥協の下に、適用せんことを努力する。それ故に、我々の研究においては、生産様式という範疇が、その創始者（マルクス）が与えようと考えた、中心的な地位を取戻している。生産様式という範疇と共に、生産諸力なる範疇が、中心に向って現出する。更に、この生産諸力なる範疇の内部では社会的な生産諸力と並んで、それと共に、自然によって条件づけられた生産諸力を、マルクス及びエンゲルスが意味したところの、決定的な意義において、歴史分析のうちに、根をおろさせることが、この上もなく肝要である。」

名著『機械発明史』の著者 A. P. アッシャーのシュムペーター批判（修正？）が、矢張同様な（自然的契機の強調、問題化という意味での）ポイントを押えている。

シュムペーター『景気循環論』における一つの表現——「生産資源の増大は、一見したところ、内的変化の過程における明白な根本的動因たるように思われる。が、物的な諸事情は一定であるとして理解される——その増大は、それ自体人口増加や生産財のストックの増加に吸収されるからである」、について、アッシャー（「経済発展の理論の歴史的意味内容」）の曰く、「ここで言われている物的諸事情の概念は普通のものであるが、しかしこれらの目的にとっては、不十分なものである。生産資源は、現存の利用し得る技術によって経済活動のために用いられ得る全地理的事情の一部に過ぎない。分析の目的のためには、この事情の幾つかの型を区別して認識することが必要である。即ち、全地理的事情、潜在的な経済的事情、現行の経済的事情、現下焦眉の経済的事情等が、これである。潜在的資源は、技術や市場需要のあり得べき変化を含む。現行の資源は、おそらく技術や市場需要に何らかの変化がなくとも利用し得るであろう。もっとも、多くの斯様な資源は現在なお活用されていない。現下焦眉の資源は、いうまでもなく現在利用されつつある資源のことである。従って、生産資源の総量は、技術の明白な函数であり、革新に極めて敏感である。蓋し、潜在的資源は、嘗ては実行し得る費用水準ではとても経済的意義の見出し難かったような発明・発見を利用することによって増大せしめられるからである。」

アッシャーが行ったと全く同じ論旨——資源（自然）は一定のものではないし、又「物的な諸事情は一定である」と考えること・「自然は常に同一であるという考え方」は許されないという見解——を、ウィットフォードは『東洋の専制主義』（1957）で、改めて確認している。「自然は常に同一であるという一般的な考え方——この考え方から環境主義 environmentalism といった静態的な理論が生れ、同様に静態的に廃棄された——とは反対に、自然は、人間が単純なもしくは複合した歴史的原因に対応してその技術装備、その社会組織、及びその世界観を大きく変えるに従って、大きく変化する。人間はその自

自然的環境に働きかけることを決してやめない。彼は絶えずそれを変形するのであり、彼の努力から新しい機能水準に到達するにつれて新しい力を現実化 actualize する。果して新しい水準に到達出来るかどうか、又到達した場合どこに導かれるかということは、第一に制度的秩序、第二には人間活動の究極の目標——人間の近づき得る物理的、化学的、及び生物学的世界——に依存する。制度的条件が等しいとすれば、技術、生存、及び社会的統御の新しい形式の発展を示唆し許容する——或は排除するのは、自然的背景の差異である。……」

もっとも、ウィットフォークは、この確認において、彼が従前の唯物主義的・マルクス—辺倒の立場の修正を行ったことを、註している。「この定式化は、制度的（及び文化的）要因の一義的重要性を強調している点で、人間と自然についての私の以前の考え方と異なる。この前提からして、本書のあとの部分で展開した論点——歴史的に開放された情勢において真の選択を行う人間の自由という点の認識が出てくる。こうした点の修正——それは以前受け入れていたマルクスの一定の考え方に対する私の批判にとっては基本的な問題だが——を除けば、私は以前の見解を実質的に継承している。」

アッシャーの批判的となったシュムペーターの考え方——自然的条件を所与とする——は、その実、（マルクスについて前述したと全く同様）シュムペーターの「発展」についての問題・問題処理が、「純粋理論」の方法に基づいての、自明のやり方であったことによる。

シュムペーター『経済発展の理論』において曰く、「我々は……変動する諸条件が何であるかを問うのではない。……むしろ我々がここで問わんとし、しかも理論一般が問う如き全く普遍的なる問題は、如何にして斯かる変動が成就されるか、又それは如何なる経済現象をそこに展開せしむるか、これである。」「我々の意味する発展——それは普通の意味での発展のなかで、一方では特に『純粋経済的なるもの』、又他方では経済理論の立場から原理的に重要なものである——…。」「極めて狭義且つ形式的な——発展のすべての具体的内容を捨象せる——意味での経済的発展問題こそ、我々の問題とするところなのである。」

しかし、だからといって、アッシャーの批判がナンセンスだとは到底言えない事情が、実は、我々の科学（経済学）、殊に二流以下（亜流）のそれにはあるのである。

ケインズは、『雇用・利子及び貨幣の一般理論』第十八章において、「与えられたもの」即ち与件に関する規定を行い、その後で、慎重にも次の如く書いている。「このことは、我々がこれらの要因を不変なものと想定するということを意味するものではなく、ただ、この場所及びこの文脈において、我々がそれら諸要因の諸変化の効果と帰結とを考察しないとか、或は考慮に入れないとかいうことを意味するに過ぎない。」

ケインズのこの断り書は自明である。にも拘らず、我々の大抵（の実際）における場合

そのことが自明となっていないのである。

経済学の偉大な教師達は、一体に、彼等が偉大なるが故にこそ却って、斯かる点、（我々を導くに）極めて不親切であった。かるが故に、我々は多くの場合、致命的な誤解を侵しているか、甚しい感違いをしているのである。——経済における自然的契機は、研究の過程においてさえ、これを全く無視してもよい、というのが、その重大な間違いの一つである。

これは又、何故ウィットフォージェルが、我々一般の場合において重要であるか、従って何故、私がウィットフォージェルを今更改めて扱わざるを得ないか、ということの基本的な理由となっている。

我々の未来が、そのまま「黄金製の便器」の使用に繋がっている（レーニン）という、——宗教的託宣・政治的スローガンの類ならともかく——愚かしくも・馬鹿げた科学的根拠なき迷論、空想的神秘説（神秘家）の出る限り、我々の尚、究明せねばならぬ問題がそこにはある、ということが、はっきり断言出来る。

自由の王国は、その基礎としての役をなす自然必然性の王国が拡大すると
同じ程度にのみ、拡大され得る。

ウィットフォージェルは続けて言う、「これ以外の如何なる解答も、それは神学と神秘主義に通ずるものである。」

たとえば、ゾムバルトは、『ドイツ社会主義』において、「マルキシズムにおける誤謬」の一つとして、「将来における富が無限であるという予言は、最も空想的である」と批判している。（私も又、その論旨からして、同感である。）

「それは高度資本主義時代における富の発展の条件を、完全に誤解したことに基づく。人は現代における富の増加が、主として19世紀に起った生産及び交通方面における技術の進歩の結果であることを、無雑作に仮定する。しかし、彼は、一聯の特殊条件が結合したからこそ、この技術の進歩が作用を発揮し得たのであることを忘れている。19世紀の富は主として新しき土地の開拓に基づく。人は掠奪農業を行った。更に又、石炭、鉱物層に動力源の貯えられていること及びその利用法を知って、初めてこれに手をつけた。土地の利用は斯かる方法によってなされたのである。故にその限りにおいて、19世紀の富は所得の増大ではなくして、資産を經常収入の中に繰入れたことに存するのである。……これらの好都合な事情は、勿論、一度限りのものである。……将来における財の生産は、はるかに不利な条件の下に行われるであろう。……」

ワルトハイム国連事務総長は、6月5日、「世界環境の日」に当り声明を発表、地球利用の現在の傾向が変らずにこのまま続けば、人類は大きな不運に陥る危険性があると次のように警告した。

一、我々は天然資源が無尽蔵ではないことを充分認識している。

一、我々は又、あらゆる代価を支払って向う見ずに成長を追求する場合、深刻な長期的結果が生れることを知っている。

一、我々の目的は、人類が正しく保護される真の成長でなければならない。

一、人類の直接且つ正当な必要と、今後の世代の利益の保護を調和させる方法を見出す緊急の必要性がある。

今日、自然が、我々に課している技術的・経済的諸問題は、我々が普通想像する以上に深刻なのが現状である。少くとも現世界人類の二分の一から三分の二の死滅、乃至それに相当する窮迫が、（嘗ってのヨーロッパにおけるペストの流行が産業革命の導火線となった如く）その対応策を我々に工夫、発明させるのではないかと私は時に悲観し、時に楽観している。

正確に、且つはっきり言って——斯かる危機に対処すべく、我々の科学(者)、殊に経済学(者)は、完全に無力である(か、ひどく立ち後れている。)

かくてイザヤの予言は、我等の上に成就す。曰く、

『なんぢら聞きて聞けども悟らず、

見て見れども認めず。

この民の心はにぶく、

耳は聞くにものうく、

目は閉ぢたればなり。

..... 』

我国の場合、この科学（経済学）のもつ特有のドグマ性、或は他国への追従性よりして、そのギャップは、殊更に大きいと言うべきである。

或は、我々お目出たき人々が、この間隙に気付くのは、我々人類、我等の遊星（地球）の最後の日、所謂「世の終り」においてであるのかもしれぬ。噫々。

幸いなるかな、心の貧しき者。

'73.7.5.